

## 家族だけがケアの担い手ではない①

前回のコラムでお伝えしたように「家族の中で起こったことは、家族の中で解決すべき」という価値観が根強い日本の社会において、近年は、家族のありようが大きく変革しているにもかかわらず依然としてこの価値観に支配されつづけているために、大きな苦悩を抱えている現役世代が急増しています。



大手企業で責任ある地位にある都内在住のMさん(56)は、同じ企業の別の部署で働く妻と大学生の子供2人の4人家族で暮らしています。父親は10年前に他界し、母親(83)が実家の新潟県でひとり暮らしをしています。最近、認知症と思われる症状が気になり始め、Mさんが月に一度は新潟の実家を訪ねるようになり、今後の母親の世話をどうするかという不安を抱いていました。

そんな中、亡き父親の妹にあたる叔母が、その夫である義理の叔父から暴力を受けたと都内の大学病院から連絡がありました。叔母夫婦には子供がいないので、甥であるMさんに連絡が入ったようです。とはいえ、Mさんも叔母夫婦とは、10年前の父親の葬儀以来、まったく連絡を取っていませんでした。

叔母のことはほとんど知らないけれど、亡くなった父親の妹だし、子供の頃はよくかわいがってもらったし、親族だから無視するわけにはいかないだろう・・・という気持ちだけで、大学病院の相談員からの呼び出しに応じることにしました。

しかしそれから先、Mさんが叔母夫婦の親族として、芋づる式に関わらなければならなくなったことはとてつもなく時間もお金も心労も要することでした。叔母の入院や手術の手続き、退院後の生活環境整備、介護保険申請、その後の介護保険関係の契約、そして、叔母に暴力をふるってしまった義理の叔父と、介護が必要になってしまった叔母とを同居させるわけにはいかず、精神的な異常がある義理の叔父の療養先を決めるのもMさんに託されてしまいました。

途中で「もう無理です」と投げ出そうとしても、病院や介護の関係者に「甥っ子さん」と呼ばれてしまうと「親族だからやらなければ」という責任感を重く感じてしまいました。妻からは「なんであなたがここまでやらなければならないの?」と責められ、仕事も有給休暇を費やしてしまったところで、新潟の母親の認知症が進行し、近所で徘徊していたところを警察に保護されたとの連絡が入りました。

Mさんは、いったいどこまでやれば良かったのでしょうか。もちろん正解はありません。ただ「家族だから、親族だからMさんがやるべき」という価値観や美学を、自分自身も周囲の人たちも持ち続けていると、Mさん自身の精神面にも変調を来たすことになるし、Mさんの仕事のパフォーマンスが劇的に下がることは避けられないでしょう。

超高齢社会をむかえ、現役世代の負担が増大する今、「家族だけがケアの担い手ではない」という新しい価値観を推進していかなければなりません。 つづく